

也し事也、賢按、此時代男色の流行しける事如此也。

〔鹽尻 三十六〕元祿十二年、永井氏を笹瀬氏に尋られし時に書付て、其臣中村氏江出しける草案彼が家に有、今其籍記を寫し侍る。○中略

一、四月○天文十四年十五日、宮千代丸昨日上洛、今晚御禮に參る、仍而於小御所御酒宴と云々、

自注に云、宮千代丸は美少年、有百媚、父は岩村と云、織手屋也、根本都之者也、此十ヶ年計居住境此兒學猿樂無雙の器用也、此二三年密に令禮候禁中云々、賢按、舞々桃井幸若丸の起、按するに、本も此類之事なるべし。

宮千代丸は、美童の猿樂一座の大夫也、永正十四年孟夏を、初秋に至る迄在京時々内内夏之事にも召れ、

御寵愛と見得たり、其間勸進能等も有しかば、親王大樹以下公武の諸家、彼が色に淫せし事、此

記に見得たり、七月十二日、泉州下向之時、餞別の人も多く、別を惜みあへり、其かみは猿樂之外

には、勝れたる遊興も無りしにや、斯る色に壹人万人いとまよひ侍べる、田樂之中にも、美少年

有よし見へけれど、又一等下窄のやうにゑるせり、今日の如き倡優家の美花夷イロハに盛んにして、

色をひさぎ、人を惑す事、遊女と替る事なしと也、嗚呼分桃斷袖ウラハの情かくにや、誠に思ひ出る常

盤之山にと言をよせて、あだなる色にもそみ侍る、伊訓のむかし、安陵龍陽の諸傳は更也、代

代之淫幸、史に筆を絶す、晉の時に盛ん也しにや、強年は容貌舉止を以て銜鑑を定むとい

へり、感寧大康の後は、男寵女色より甚し、海内倣倣して、夫婦離絶しや、もすれば、怨憤を生ず

るに至りしよし、舊文に記せり、剩へ少人孕婉之事、迄見得侍るにや、我國稱徳帝の比にや、男寵

之事始めて史に見得たりしより、絶ぬ情の通り迷ひ入るは、山玄げ山幾代の恨をか聞侍べる、

後世雄長して賣色の家さへ出起りて、公行し侍るにや、

〔老人雜話下〕羽柴長吉は、太閤の小姓無比類美少年也、太閤或時人なき所にて、近く召す、日比男色を好み給はぬ故に、人皆奇特の思ひをなす、太閤とひ給ふは、汝が姉が妹ありやと、長吉顔色好き